

jecon.bst:  
経済学用 BibT<sub>E</sub>X スタイルファイル  
(for ver. 1.12)

武田史郎\*

平成 17 年 8 月 24 日

\$Id: jecon-sample.tex,v 1.13 2005/08/24 09:54:34 st Exp \$

## 目 次

1	導入	1
2	使用例	2
3	使用法	4
3.1	必要なもの	4
3.2	jecon.bst のインストール	5
3.3	.bib ファイルの書き方	5
3.3.1	邦訳書の情報も付ける場合	6
3.3.2	邦訳書	7
3.4	.tex ファイルの書き方	8
3.5	コンパイル	8
4	カスタマイズ	9
4.1	関数についての注	9
4.2	例	9
5	不具合	12
6	その他	12

## 1 導入

[ 注 ] この jecon.bst を利用するには、当然 BibT<sub>E</sub>X 自体を使えるようになっていなければいけません。以下では BibT<sub>E</sub>X の説明はしていません。BibT<sub>E</sub>X については、T<sub>E</sub>X 関連の書籍・ウェ

---

\*email: zbc08106@park.zero.ad.jp, web site: <http://park.zero.ad.jp/~zbc08106/>

ウェブサイト等で調べてください。

BIB<sub>T</sub><sub>E</sub>X の標準的なスタイルファイルの中には、jplain.bst、jalpha.bst、jabbrev.bst 等のように日本語の文献にも対応しているものがすでに幾つもあります。しかし、これらのスタイルファイルでは、経済学でよく用いられる「著者名 (年)」という形式で引用することはできません<sup>1</sup>。また、Reference に列挙する形式も経済学で通常使われている形式とは異なっています。

一方、経済学で用いられる参照形式を実現する BIB<sub>T</sub><sub>E</sub>X スタイルファイルとして、aer.bst、ecta.bst、cje.bst 等があります<sup>2</sup>。これらの BIB<sub>T</sub><sub>E</sub>X スタイルファイルを、natbib.sty、あるいは、harvard.sty と同時に使うことで「著者名 (年)」形式で引用することができます。また、Reference 形式も経済学でよく見られる形式のものにすることができます。しかし、これらのスタイルファイルは、英語の文献を前提として作られているため、日本語の文献を適切に扱うことができません<sup>3</sup>。

飯田修さんという方が<sup>4</sup>、英語・日本語の両方の文献を扱え、しかも「(著者名、年)」という形式で引用することが可能な jpolisci.bst というスタイルファイルを作成してくれているのですが、この引用形式は「(著者名、年)」ですので、ちょっと経済学の標準的な形式とはずれています。

このように、経済学の標準的な形式で日本語・英語を両方扱える BIB<sub>T</sub><sub>E</sub>X のスタイルファイルがないようだったので、jecon.bst というものを自分でつくってみました。もっとも、つくったと言っても飯田さんの jpolisci.bst をほんの少し修正しただけです。

jecon.bst を使うと次のようなことができます。

- harvard.sty、あるいは、natbib.sty と組み合わせることで「著者名 (年)」形式で引用可能。
- 英語の文献だけでなく、日本語の文献も適切に処理することが可能。

日本語で経済学の論文を書き、日本語、英語の文献の両方を引用・参照するような人にとっては役に立つのではないかと思います。

## 2 使用例

言葉で説明してもわかりにくいので jecon.bst の使用例を挙げます (一緒に natbib.sty を使っています)。例えば、

<sup>1</sup>\cite 命令を使ったときのなしです。

<sup>2</sup>それぞれ、American Economic Review 形式、Econometrica 形式、Canadian Journal of Economics 形式のスタイルファイルです。

<sup>3</sup>「英語」対象というより、正確には欧米の言語対象適切ですが。

<sup>4</sup><http://www.bol.ucla.edu/~oiida/jpolisci/>

```

\cite{miyazawa02:_io_intr},
\cite{isikawa02jp:_env_trade},
\cite{oyama99:_mark_stru},
\cite{kuroda97jp:keo},
\cite{kiyono93:_regu_comp_1},
\cite{iwamoto91jp:haito-keika},
\cite{ito85:_inte_trad},
\citetet{nishimura90:_micr_econ},
\cite{imai72:_micr_2},
\cite{imai71:_micr_1},
\cite{barro97jp},
\cite{markusen99jp:trade_vol_1}。\\
省略形では、\cite{imai71:_micr_1}、
\cite{markusen99jp:trade_vol_1} のようになる。

```

というような命令を書くと、次のような出力になります<sup>5</sup>。cite 命令の { } の中は私が文献のデータベースファイルの中で各文献に付けているキーワードです。

宮沢 (2002)、石川 (2002)、大山 (1999)、黒田・新保・野村・小林 (1997)、清野 (1993)、岩本 (1991)、伊藤・大山 (1985)、西村 (1990)、今井・宇沢・小宮・根岸・村上 (1972)、今井・宇沢・小宮・根岸・村上 (1971)、パロー (1997)、マークセン・ケンプファー・メルヴィン・マスカス (1999)。  
省略形では、今井他 (1971)、マークセン他 (1999) のようになる。

Reference 部分の形式がどうなるかは、この文書の参考文献の部分を見て確認してください。

natbib.sty を一緒に使っている場合には、cite 命令を変えるだけで次のような引用も可能です。

伊藤・大山 (1985)  
 (伊藤・大山, 1985)  
 伊藤・大山 (1985, p.100)  
 伊藤・大山 (1985, p.200 参照)  
 (詳しくは 伊藤・大山, 1985)

こう出力するには次のように .tex のファイルで書きます<sup>6</sup>。

<sup>5</sup>Backslash は Windows では円マークになります。

<sup>6</sup>\citetet や \citep は natbib.sty に特有の命令です。

```

\citet{ito85:_inte_trad}
\citep{ito85:_inte_trad}
\citet[p.100]{ito85:_inte_trad}
\citet[p.200 参照]{ito85:_inte_trad}
\citep[詳しくは []]{ito85:_inte_trad}

```

同じ文書内で英語の文献も同時に扱えます。

Ishikawa and Kiyono (2003), Brooke et al. (2003), Rutherford and Paltsev (2000), Fujita, Krugman and Venables (1999), Wong (1995), Brezis, Krugman and Tsiddon (1993), Krugman (1991a), Krugman (1991b), Wang, Blomquist and Spencer (1989), Lucas (1976), Milne-Thomson (1968)

.tex ファイルの命令。

```

\citet{ishikawa03:_green_gas_emiss_contr_open_econom},
\citet{brooke03:_gams},
\citet{rutherford00:_gtapin_gtap_eg},
\citet{fujita99jp:_spatial_econom},
\citet{wong95:_inter_trade_goods_factor_mobil_},
\citet{brezis93:_leapf_inter_compet},
\citet{krugman91:_geogr_trade},
\citet{krugman91:_is_bilat_bad},
\citet{wang89:_model_therm_hydrod_aspec_molten},
\citet{lucas76:_econom_polic_evaluat},
\citet{milne-thomson68:_theor_hydrod}

```

### 3 使用法

基本的に他の Bib<sub>T</sub>E<sub>X</sub> スタイルファイルを使う場合と同じですが、いくつか違う部分、気を付ける部分があります。

#### 3.1 必要なもの

jecon.bst の元になった jpolisci.bst は特別なスタイルファイルを必要とはしていませんが、jecon.bst は natbib.sty (あるいは、harvard.sty) を同時に使う必要があります。新しい L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を使っている人は標準で natbib.sty もインストールされていると思いますが、持っていない人は別に用意してください<sup>7</sup>。harvard.sty を使う場合も同様に入手してください。新しくインストー

<sup>7</sup>natbib.sty を HD で検索して見付かったらおそらくインストールされています。持っていない人は CTAN で入手してください。

ルするなら、natbib.sty のほうが良いと思います。

### 3.2 jecon.bst のインストール

jecon.bst は jplain.bst、jalpha.bst 等と同じ場所に置いてください<sup>8</sup>。jplain.bst を検索して見付かったディレクトリに入れておけばいいと思います。

### 3.3 .bib ファイルの書き方

.bib ファイルとは、拡張子が bib である BibTeX のデータベースファイルのことです。この書き方も基本的には普通の場合と同じです。3 個だけ例を挙げときます。

```
@InCollection{oyama99:_mark_stru,
  author =      {大山 道広},
  title =       {市場構造・経済厚生・国際貿易},
  editor =      {岡田 章 and 神谷 和也 and 柴田 弘文 and 伴 金美},
  booktitle =   {現代経済学の潮流 1999},
  pages =       {3-34},
  publisher =   {東洋経済新報社},
  year =        1999,
  yomi =        {おおやま みちひろ}
}
```

注意点として、

- 名前は、日本語文献では「姓 名」の順で author を指定してください (姓・名の間に半角か全角の空白を入れてください)。
- yomi フィールドを付けると日本語文献を Reference で列挙するときに並び順を考慮してくれます。yomi フィールドの記入方法には
  - ローマ字で書く (e.g. Michihiro Ohyama)
  - ひらがなで書く (e.g. おおやま みちひろ)

の 2 種類の方法があります。

ローマ字で書くケース    ローマ字で書くときには次の 3 つの形式のどれかで書いてください。

1. first name – family name (e.g. Michihiro Ohyama)
2. family name, first name (e.g. Ohyama, Michihiro)
3. family name **のみ** (e.g. Ohyama)

---

<sup>8</sup>/texmf/jbibtex/bst/ の下ならどこでもいいです。

このうち 2 は jecon.bst 以外の bst ファイルでは上手く処理できるかわかりませんので、他の bst も利用するような人は 1 (あるいは 3) の形式で書いておいたほうがよいと思います<sup>9</sup>。

yomi をローマ字で書いた場合には、英語の文献と混ざった形で alphabet 順で並べられます。

ひらがなで書くケース ひらがなで書く場合には「姓 名」(間に空白)、あるいは「姓」で書いてください。ひらがなで書いた場合、日本語の文献は著者名のあいうえお順で、英語文献とは別に並べられます。日本語文献・英語文献を分けた形で列挙したい場合は、yomi フィールドをひらがなで書くようにしてください。経済学では英語文献と日本語文献は分けた形で列挙することが多いので、yomi フィールドをひらがなで書いておくのがよいと思います。

その他 日本語文献の yomi フィールドを省略してしまうと変な順番で列挙されてしまいます。このサンプルファイルでは西村 (1990) と 片山 (2001) という文献だけローマ字指定、その他の文献はひらがな指定をしています。このため、西村 (1990) と 片山 (2001) は alphabet 順で英語文献と混ざったかたちで表示され、その他の文献は英語文献とは別にあいうえお順で表示されます。

- pages フィールドに関しては、3--34 のようにハイフンを二個続けて書いておかないときれいに表示されないのですが、jecon.bst では、上の例のように 3-34 と書いていても自動的に 3--34 と変換するので一個でもかまいません。ただ、他の BibTeX スタイルファイルも使うという人はハイフンを二個にしといたほうがいいかもしれません。

### 3.3.1 邦訳書の情報も付ける場合

また book に関しては、以下のように jauthor、jkanyaku、jtitle、jpublisher、jyear を指定することで邦訳書の情報を付け加えることができます (これは jpolisci.bst の機能をそのまま使わせていただいています)。以下の指定が reference にどう反映されるかは、後の reference 部分を見て確認してください。

---

<sup>9</sup>1 と 2 の形式では first name も書くようになっていますが、実は jecon.bst で並べ変えをする際には family name の情報しか使われません。ですので、first name を書かない 3 でも全く変わりません。

```
@Book{fujita99jp:_spatial_econom,
  author =      {Masahisa Fujita and Paul R. Krugman and Anthony J. Venables},
  title =       {The Spatial Economy},
  publisher =    {MIT Press},
  address =      {Cambridge, MA},
  year =         1999,
  jauthor =      {小出 博之},
  jtitle =       {空間経済学},
  jpublisher =   {東洋経済新報社},
  jyear =        2000
}
```

### 3.3.2 邦訳書

邦訳書を book として登録する場合には、著者が外国人であっても、名前は片仮名となると思います。このようなときには次のように指定してください。

```
@Book{barro97jp,
  author =      {R. J. バロー},
  title =       {経済学の正しい使用法 - 政府は経済に手を出すな - },
  publisher =    {東洋経済新報社},
  year =         1997,
  jauthor =      {仁平 和夫},
  yomi =        {ばろー}
}
```

#### 注意点

- 上のように登録して置けば、`\cite{barro97jp}` と書くことで、「バロー (1997)」という表示になります。
- 上の例のように first name (+ middle name) を頭文字で付け加えるなら、英語文献の場合と同じように、「first name - last name」の順で指定してください。
- 頭文字を表すアルファベットは半角で書いてください<sup>10</sup>。
- {ロバート バロー} のように first name、last name のどちらも片仮名で書いてしまうと上手く処理されません (姓名の順序が逆になります)<sup>11</sup>。
- この場合も yomi フィールドを付けないと適切には並びかえられません。

<sup>10</sup>first name、last name の両方を全角で書くと、日本人の名前と認識してしまうので。

<sup>11</sup>どうしてもどちらも片仮名で書きたい場合には、{ロバート・バロー} と書いてください。ただし、この場合には引用部分が、バロー (1997) ではなく、ロバート・バロー (1997) という形式になってしまいます。

- もう一つ邦訳書の例として、マークセン他 (1999) という文献を挙げてありますので、そっ  
ちも参考にしてください。

### 3.4 .tex ファイルの書き方

.tex ファイル (T<sub>E</sub>X のファイル) の書き方も普通と同じです。まず、プリアンプルで natbib.sty を読み込みます。

```
\usepackage{natbib}
```

harvard.sty を使う人は \usepackage{harvard} にしてください<sup>12</sup>。

さらに、\begin{document} の後で、BIBT<sub>E</sub>X のスタイルファイルとして jecon.bst を指定し  
ます。

```
\bibliographystyle{jecon}
```

引用したい部分では、

```
\citet{ito85:_inte_trad} によれば ...
```

というように書きます。harvard.sty を使っている人は、\citeasnoun{ito85:\_inte\_trad}  
です。

最後に Reference を付けたい部分で、

```
\bibliography{jecon-sample}
```

というようにデータベースファイル (ここでは、jecon-sample.bib というファイル) を指定し  
ます。

### 3.5 コンパイル

.tex ファイルのコンパイルは、普通に BIBT<sub>E</sub>X を使う場合と同じようにしてください。

<sup>12</sup>harvard.sty では、3 人以上の著者がある文献を何度も引用する場合以下のようなルールがあります。

- 一番初めに引用したときには、全ての著者名が列挙される (e.g. 今井・宇沢・小宮・根岸・村上 (1971))
- 二回目以降では、著者の中の最初の人だけの名前が出て残りは「他」と略される (e.g. 今井他 (1971))

一方、natbib.sty の場合、デフォルトでは、一回目の引用のときから、今井他 (1971) のように略した形式になりま  
す。これを harvard.sty のようにするには、

```
\usepackage[longnamesfirst]{natbib}
```

のように longnamesfirst オプションを付きで、natbib.sty を読み込みます。



- 一回 platex を実行
- 一回 jbibtex を実行
- あと、二回 platex を実行

B<sub>I</sub>B<sub>T</sub><sub>E</sub>X のコマンドとしては、bibtex ではなく jbibtex を使わなければいけません。

## 4 カスタマイズ

ちょっとした形式の変更程度のカスタマイズは簡単にできます。jecon.bst 内の最初の部分で、bst.xxx.yyy というような名前の関数がたくさん定義されています。この関数の中身を変更することで出力の形式を変更することができます。

### 4.1 関数についての注

- ここでのカスタマイズとは、参考文献部分の書式のカスタマイズのことです。引用部分の書式は、引用のために用いるスタイルファイル (natbib.sty、harvard.sty 等) に主に依存しています。
- この方法では項目の順番を変更するようなカスタマイズはできません。そのようなカスタマイズをするには jecon.bst のプログラムを書き換える必要があります (簡単にできる場合もあります)。
- .pre が付いている関数は前に付ける文字列、.post が付いている関数は後に付ける文字列を表します。
- .jp が付いている関数は日本語文献用。
- 以下で幾つか例を挙げていますが、例で挙げるもの以外にもたくさんの関数があります。自分で適当に中身を書き換えてみてください。

### 4.2 例

例 1 : author, editor 間の区切を “and” から “&” に変更する

これには bst.and と bst.ands という関数の中身を変更します。

```
FUNCTION {bst.and}
{ " and " }
FUNCTION {bst.ands}
{ ", and " }
```

これを以下のように書き換えます。

```

FUNCTION {bst.and}
{ " \& " }
FUNCTION {bst.ands}
{ " \& " }

```

すると、参考文献の author 部分が

Fujita, Masahisa, Paul R. Krugman, and Anthony J. Venables

↓

Fujita, Masahisa, Paul R. Krugman & Anthony J. Venables

となります。

## 例 2：author を small caps 体にする

これには `bst.author.pre` と `bst.author.post` という関数の中身を変更します。

```

FUNCTION {bst.author.pre}
{ "" }
FUNCTION {bst.author.post}
{ "" }

```

を以下のように変更する。

```

FUNCTION {bst.author.pre}
{ "\textsc{" }
FUNCTION {bst.author.post}
{ "}" }

```

参考文献の author 部分が

Fujita, Masahisa, Paul R. Krugman, and Anthony J. Venables

↓

FUJITA, MASAHISA, PAUL R. KRUGMAN, AND ANTHONY J. VENABLES

となります。

## 例 3：year の囲みを丸括弧から四角括弧にする

これには `bst.year.pre` と `bst.year.post` という関数の中身を変更します。

```

FUNCTION {bst.year.pre}
{ " (" }
FUNCTION {bst.year.post}
{ ") " }

```

を以下のように変更する。

```

FUNCTION {bst.year.pre}
{ " [" }
FUNCTION {bst.year.post}
{ "]" " }

```

これで、(2004) が [2004] という形式になります。日本語文献用の year の囲みも変更したい場合には、bst.year.pre.jp と bst.year.post.jp という関数の中身も同じように変更します。

#### 例 4： volume と number の書式の変更

これには bst.volume.pre、bst.volume.post、bst.number.pre、bst.number.post という関数の中身を変更します。

```

FUNCTION {bst.volume.pre}
{ ", Vol. " }
FUNCTION {bst.volume.post}
{ "" }
FUNCTION {bst.number.pre}
{ ", No. " }
FUNCTION {bst.number.post}
{ "" }

```

を以下のように変更する。

```

FUNCTION {bst.volume.pre}
{ ", \textbf{" }
FUNCTION {bst.volume.post}
{ "}" }
FUNCTION {bst.number.pre}
{ " (" }
FUNCTION {bst.number.post}
{ ")" }

```

これで参考文献の volume, number の書式が、“Vol. 5, No. 10” から “5 (10)” となります。

#### 例 5： 同じ author を — で省略せず、常に表示するようにする

これには bst.use.bysame をという関数の中身を変更します。

```

FUNCTION {bst.use.bysame}
{ #1 }

```

を以下のように変更する。

```
FUNCTION {bst.use.bysame}  
{ #0 }
```

## 5 不具合

次のような不具合があります。

- 元の jpolisci.bst は縦書きにも対応していますが<sup>13</sup>、jecon.bst は基本的に横書きのことしか考慮していません。
- 私自身が、article, book, incollection, unpublished くらいしか使わないので、それ以外のタイプはあまりチェックをしていません。このため上手く処理できない可能性が高いです (ある程度はチェックはしていますが)。
- crossref エントリーを使用しても上手く表示されないと思います。全然チェックしてません。

## 6 その他

- この jecon.bst の元になった jpolisci.bst を作成してくださった飯田修さんに感謝します。そもそも jecon.bst なんて名前を付けてますが、プログラムの重要な部分のほとんどは jpolisci.bst をそのまま利用させてもらっています。
- 改変には aer.bst、萩平哲さんのウェブサイト<sup>14</sup>、樋口耕一さんによる nissya.bst<sup>15</sup> 等も参考にさせていただきました。これらの有益なプログラム、ページを作成してくださった方々に感謝します。
- jpolisci.bst を直したといっても、natbib で使えるように無理矢理に書き換えただけです。bst ファイルの書式はあんまりわかってません。なにかもっといいものを御存知の方がいたら教えてください。
- この PDF ファイルと一緒に、このファイルの元となる TeX ファイル (jecon-sample.tex) と文献ファイル (jecon-sample.bib) も配布しているので、TeX ファイルの書き方、文献の登録の仕方はそちらも参考にしてください。
- とんでもない不具合があったらすぐ直します。<zbc08106@park.zero.ad.jp> に連絡ください。
- ここをこうして欲しい、こうしたいという要望がありましたらおっしゃってください。ぼくに直せるようなものだったら直しますので。

<sup>13</sup>縦書きの場合、数字を漢数字にするというような特別な処理をしてくれます。

<sup>14</sup> <http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/anes/www/latex/bibtex.html>

<sup>15</sup> <http://hey.to/K0-ichi> より入手可能です。

## 参考文献

- Brezis, Elise S., Paul R. Krugman, and Daniel Tsiddon (1993) “Leapfrogging in International Competition: A Theory of Cycles in National Technological Leadership”, *American Economic Review*, Vol. 83, No. 5, pp. 1211–1219, December.
- Brooke, Anthony, David Kendrick, Alexander Meeraus, and Ramesh Raman (2003) *GAMS: A User’s Guide*, GAMS Development Corporation.
- Fujita, Masahisa, Paul R. Krugman, and Anthony J. Venables (1999) *The Spatial Economy*, Cambridge, MA: MIT Press. (小出博之訳『空間経済学』, 東洋経済新報社, 2000年).
- Ishikawa, Jota and Kazuharu Kiyono (2003) “Greenhouse-Gas Emission Controls in an Open Economy”, November. COE-RES Discussion Paper Series, Center of Excellence Project, Graduate School of Economics and Institute of Economics Research, Hitotsubashi University.
- 片山恭一 (2001) 『世界の中心で愛を叫ぶ』, 小学館.
- Krugman, Paul R. (1991a) *Geography and Trade*, Cambridge, MA: MIT Press.
- (1991b) “Is Bilateralism Bad?”, in Elhanan Helpman and Assaf Razin eds. *International Trade and Trade Policy*, Cambridge, MA: MIT Press, pp. 9–23.
- Lucas, Robert E., Jr. (1976) “Econometric Policy Evaluation: A Critique”, in *The Phillips Curve and Labor Markets*, Vol. 1 of Carnegie Rochester Conference Series on Public Policy, Amsterdam: North-Holland, pp. 19–46.
- Milne-Thomson, L. M. (1968) *Theoretical Hydrodynamics*, 5th edition, p. 480, London: Macmillan Press.
- 西村和雄 (1990) 『ミクロ経済学』, 東洋経済新報社.
- Rutherford, Thomas F. and Sergey V. Paltsev (2000) “GTAPinGAMS and GTAP-EG: Global Datasets for Economic Research and Illustrative Models”, September. Working Paper, University of Colorado, Department of Economics, (available at: <http://debreu.colorado.edu/gtap/gtapgams.html>).
- Wang, S. K., C. A. Blomquist, and B. W. Spencer (1989) “Modeling of Thermal and Hydrodynamic Aspects of Molten Jet/Water Interactions”, in *ANS Proc. 1989 National Heat Transfer Conference*, Vol. 4, pp. 225–232, Philadelphia.
- Wong, Kar-yiu (1995) *International Trade in Goods and Factor Mobility*, Chap. 2, pp. 23–84, Cambridge, MA: MIT Press.
- 石川城太 (2002) 「環境政策と国際貿易」, 池間誠・大山道広 (編) 『国際日本経済論』, 文眞堂, 第7章, 114–129頁.
- 伊藤元重・大山道広 (1985) 『国際貿易』, モダン・エコノミクス 14, 岩波書店.
- 今井賢一・宇沢弘文・小宮隆太郎・根岸隆・村上泰亮 (1971) 『価格理論 I』, 岩波書店.

—— (1972) 『価格理論 II』, 岩波書店.

岩本康志 (1991) 「配当軽減制度廃止の経済的効果 — 89 年法人税改革の分析 —」, 『経済研究』, 第 42 巻, 第 2 号, 127–138 頁, 4 月.

大山道広 (1999) 「市場構造・経済厚生・国際貿易」, 岡田章・神谷和也・柴田弘文・伴金美 (編) 『現代経済学の潮流 1999』, 東洋経済新報社, 3–34 頁.

清野一治 (1993) 『規制と競争の経済学』, 27–31 頁, 東京大学出版会, 東京.

黒田昌裕・新保一成・野村浩二・小林信行 (1997) 『KEO データベース—産出および資本・労働投入の測定—』, Keio Economic Observatory Monograph Series, 第 8 号, 慶應義塾大学産業研究所.

パロー, R. J. (1997) 『経済学の正しい使用法 - 政府は経済に手を出すな - 』, 東洋経済新報社. (仁平和夫訳).

マークセン, J. R.・W. H. ケンプファー・J. R. メルヴィン・K. E. マスカス (1999) 『国際貿易 - 理論と実証 上 』, 多賀出版. (松村敦子訳).

宮沢健一 (編) (2002) 『産業連関分析入門 新版 』, 日本経済新聞社, 第 7 版.